尼崎市教育委員会　９月臨時会　議事録

１　開会及び閉会の日時

令和８年９月１０日　　午前９時０２分～午前９時４５分

２　出席委員及び欠席委員

出席委員等	教　　育　　長	森山	太嗣
	教育長職務代理者	徳山	育弘
	委　　員	太田垣	亘世
	委　　員	片谷	勉
	委　　員	庭山	和貴

３　出席した事務局職員等

教　育　次　長	藤川	明美
教　育　次　長	嶋名	雅之
管　理　部　長	佐々木	修
学校教育部長	尾崎	匡
企画管理課長	西川	欣伸
学校教育課長	柳	伸彦

日程第１　協議・報告

（１）　令和８年度全国学力・学習状況調査の結果について

午前９時０２分、教育長は開会を宣した。

森山教育長　　本日の日程につきましては、配布している日程表のとおりです。

森山教育長　　それでは、これより日程に入ります。日程第１「協議・報告」の「令和８年度全国学力・学習状況調査の結果について」を議題とします。提案理由の説明を求めます。

学校教育課長　　学校教育課長でございます。本年４月に実施されました「令和８年度 全国学力・学習状況調査」の本市における結果と分析、ならびに今後の指導改善に向けた取り組みについてご報告申し上げます。説明に入ります前に、「結果報告」の資料につきまして、今年度より、従来の簡易な報告形式から、「冊子形式」の報告書へと変更した経緯について、冒頭ご説明いたします。

今年度は、子どもたちの学力を多角的に分析し、「尼崎の子どもたちの強みはどこにあり、どのような課題を抱えているのか」、「指導や支援を要する箇所はどこか」、そして「先生方が授業の中で日々行っている努力やその成果、さらには授業力向上に向けて今後どのようなアプローチが必要なのか」を具体的に可視化し、共有することが重要であると判断し、このような形に変更いたしました。あわせて、今回は１ページの下の方にありますように、平成１９年度からの長期的な推移を示すグラフも掲載しております。これにより、単年度の結果に一喜一憂するのではなく、本市の子どもたちの学力が中長期的にどのように向上してきたか、その歩みと成果を視覚的に捉えやすいよう工夫いたしました。

なお、調査の実施日や対象者数、調査対象教科などの詳細な「実施の概要」につ

きましては、時間の都合上、お手元の資料１ページにまとめてございますので、後ほどご覧いただければと存じます。ここで、具体的な数値報告に入る前に、今年度の中学３年生の英語の調査につきまして、１点ご説明させていただきます。今回の英語の調査は、国語や算数・数学といった教科とは実施方法および評価の仕組みが根本的に異なり、同じ「正答率のパーセント」という尺度で同列に扱うことはできません。コンピュータを使ったテストにより実施されたため、その採点には、公開問題と非公開問題を組み合わせ、問題の難易度などを考慮して実力を数値化する「IRT」という仕組みが採用されております。従いまして、英語のみ「何問正解したか」の単純な正答率ではなく、全国平均を５００とする尺度で表した「平均 IRT スコア」という数値で評価されております。ご承知おきくださいますようお願いいたします。

それでは、資料の２ページから始まります「教科に関する結果の概要」に沿って、本市の全体的な特徴からご説明いたします。今回の調査結果において、尼崎市全体の平均正答率（英語は平均 IRT スコア）は、小学校・中学校ともに、帯学習や放課後学習をはじめとする、これまでの地道な学力向上施策の成果がはっきりと現れる結果となりました。まず、小学校６年生でございます。国語の平均正答率は６１％であり、全国平均とまったく同等でございます。続いて、４ページをご覧ください。算数につきましても平均正答率は５６％で、こちらも全国平均と同等となりました。小学校においては、国語・算数ともに全国平均の水準にまで達しております。これは現場の先生方と子どもたちの継続した頑張りの大きな成果であると受け止めております。次に、中学校３年生でございます。６ページをご覧ください。国語の平均正答率は６２％で、全国平均の６４％に対して差はマイナス２ポイントとなっております。これは問題数にしますと、０．３問の差となります。続いて、８ページをご覧ください。数学は平均正答率５６％で、全国平均の５７％に対し差はマイナス１ポイントとなっております。こちらも問題数にしますと、０．１問の差となります。国語・数学共に全国水準と同程度の結果が出ております。続いて、英語につきましては、１０ページとなります。本市の平均 IRT スコアは４９５で、全国平均の４９９に対して差はマイナス４ポイントとなっておりますが、１０ページの中ほどにありますように IRT バンドの３に入っており、全国と同程度の結果が出ていると言えます。英語に関しましても、全国平均との差は極めて僅差でございます。一時期に比べて全国水準との乖離が着実に縮小し、尼崎全体の学力が底上げされている傾向がはっきりと見て取れます。

続いて、各教科の「領域別」の分析から見えてきた、本市独自の「強み」と「克服すべき課題」について、具体例を挙げてご報告いたします。資料の２ページから１１ページにわたり、各教科のグラフと問題例を掲載しております。少し戻りますが、３ページをご覧ください。小学校国語におきましては、漢字の読み書きなど「知識・技能」は全国平均を上回る強み、正答率５２％、全国平均よりプラス６．８pt を発揮している一方、本市で以前から見られる傾向として、「文章のなかの言葉と言葉、あるいは筆者の考えとそれを支える具体例との関係を正しく結びつけて読み取る力」に課題が見られます。誤答分析を行いますと、文章を漠然と読み流してしまい、筆者の主張と関係のない具体例を選んでしまうケースが見受けられました。５ページをご覧ください。小学校算数では、数値を四捨五入して概数で表す処理能力（正答率６９．６％、全国平均よりプラス３．１pt）が大変よく定着しております。一方で、立方体などの立体図形において「１辺１センチのブロックがいくつ分あるか」といった体積の感覚を、感覚・イメージとして捉えて立式する課題が浮

き彫りになりました。単に公式に当てはめるだけでなく、「かさ（体積)」の仕組みについて実感を伴って理解させることが不可欠であると考えております。

続いて、７ページをご覧ください。中学校国語では、言葉の特徴や文法の決まりを正しく理解し活用する力（正答率８６％、全国平均よりプラス０．６pt）が強みです。しかし、「立場が異なる複数の意見を比較・検討した上で、自分の考えを整理して文章にまとめる力（正答率４８．１％、全国平均よりマイナス４．６pt)」に課題が残されています。続いて、９ページをご覧ください。中学校数学は、「数と式」領域（正答率６８％)、及び「関数」領域（正答率５５％）において、全国平均と肩を並べる良好な成果を上げております。基本的な数式の処理や、関数の変化や関係を捉えて計算する力は、本市の子どもたちにしっかりと定着している強みでございます。一方で、「データの活用」領域（正答率５１％、全国平均よりマイナス３ポイント）に明確な課題が見られます。続いて、中学校の英語の結果でございます。１０ページ上部の IRT スコア集計値をご覧ください。尼崎市の英語のスコアは、標準偏差が「１００．６」と、全国の「１０８．１」に比べて大幅に小さいという際立った特徴を示しております。これは、生徒間の学力格差、つまり「ばらつき」が非常に小さく、「基礎的な学力を持った『中間層』が非常に厚くまとまっている集団」であることを示しています。実際に、パーセンタイル値の下位１０％および２５％のスコアは全国平均を上回っており、尼崎の英語教育におけるボトムアップ、基礎学力の定着が図られた結果であると、教育委員会としても評価しております。今後は、この厚い中間層からさらに高得点層（バンド４・５）を増やしていく指導が課題であると考えております。

次に、資料の１２ページをご覧ください。ここからは、「子どもの学習意欲や習慣が、実際の調査の正答率にどう影響しているか」のクロス分析結果でございます。質問紙調査において、子どもたちの「学習習慣」や「学びへの態度」に関する質問への回答と、調査の正答率を重ね合わせたところ、「主体的な学び」「対話的な学び」「振り返りの習慣」が身についている子どもほど、調査の正答率が圧倒的に高いという因果関係が、明確な数値として表れています。これらのデータは、私たちが目指すべき学力向上の本質が、単なる詰め込み教育ではなく、「粘り強さ」「対話」「振り返り」といった『学びに向かう力や習慣』をいかに授業のなかで育むか、という点にあることを物語っています。

最後に、巻末には、小学校・中学校の児童生徒の質問紙に対する詳細な回答結果を集計した資料を掲載しております。これは子どもたちの生活リズムや学習環境を把握する非常に有用な基礎データでございます。ご紹介のみとさせていただきますが、後ほどお目通しいただければと存じます。教育委員会といたしましては、今回明らかになった強みと課題を教育現場にフィードバックしていきながら、すべての教員の授業力向上へとつなげてまいります。子どもたちの主体性を引き出す教育、そして「尼崎で学んでよかった」と実感できる学校づくりに邁進してまいります。

以上をもちまして、令和８年度全国学力・学習状況調査の結果報告とさせていただきます。

森山教育長　　説明は終わりました。この学力向上に関係する取り組みにつきましては、これまで尼崎の長年の課題でございまして、本年度の結果はこういう状況でございましたが、色んなご質問があろうかと考えております。それではどうぞよろしくお願いいたします。

太田垣委員　　英語の結果について、IRT スコアによる評価はいつから導入されたのか、また平均の正答率との違いを教えてほしい。

学校教育課長　　全国学力・学習状況調査においてコンピュータを使ったテストの実施が始まってから、英語では初めて IRT という仕組みが使われているかと思います。私も実際現場で見たわけではないですが、コンピュータ上で提示される問題が生徒によって異なります。難易度は全体的に揃えておりますが、例えば問題に出てくる言葉や数値が異なり、それぞれ違った問題に対して生徒が回答します。テストの難易度は同じなので、調査結果として、どの程度回答できているかを比較できるという項目反応理論というものになります。よって、全国平均を５００として、それと比べてどれぐらいの位置にあるかという形で、全国と尼崎市とで比較しております。

太田垣委員　　尼崎市の前年度と今年度の結果の比較はできるのか。

学校教育課長　　英語については今年度から IRT スコアによる公表となったため、前年度との単純比較は行っておりませんが、今後は IRT の問題になりますので、来年度からは前年度との比較ができていくかと考えております。

太田垣委員　　尼崎市は中間層が多いということに対する課題を教えてほしい。

学校教育課長　　中間層が多いということは、下位層の子どもたちが全国に比べて学力を高水準に保っており、しっかりと力をつけているということです。逆に上位層の子どもたちが全国と比べたら少なく、真ん中に集まっている集団であるということもわかっております。１０ページの下の分布図をご覧いただきますと、折れ線グラフが全国の位置を示しており、棒グラフが尼崎市を示しております。IRT バンドの３のところに尼崎の子どもたちの約４０％がおりまして、尼崎はこの中間の子どもたちが多く、上位層の子どもたちが少ないという状態なので、上位層が増えるように力を入れていく必要があると分析しております。

森山教育長　　国のテストなので国が考えることですけれども、今後、国語や数学・算数でも IRT での問題が出題されるという考えでよろしいですか。

学校教育課長　　まだ国の方針は出てきておりませんが、来年度以降の全国学力・学習状況調査がすべての教科において、コンピュータベースドテスティング（CBT）になりますので、おそらく IRT になってくるのではないかと思います。また先日 PISA 調査という OECD 加盟国等が参加している調査があり、それも IRT で全部行われて経年比較ができるような仕組みになっています。

庭山委員　　IRT は、TOEIC でも使われているテスト理論で、TOEIC は何度受けても、例えば最初が７００点だった人がもう一度受けて７５０点、８００点というふうに比較が可能になっている。その背景には、難易度が同じ問題の集まりが背後にあって、その中からランダムに出題されるということであり、これらの問題の難易度が同一なのは、IRT の理論を用いて統計学的に確かめられているようだ。よって IRT の一番の利点は、子どもたちが、例えば小学校４年生から５年生、６年生と学年が上がっていったときに縦断的に同じ子どもたちがより難易度の高い問題が解けるようになっ

ているかという個人の内の伸びを客観的に測れるところである。埼玉県が先駆けて県全体で導入し、最近では堺市や京都府も IRT を取り入れていたかと思う。

そういった意味では、全国学力・学習状況調査は、小６と中３の特定の学年しか行われていないので、その個人内の伸びを複数年にわたってこれまでよりも比較的正確に難易度の高い問題が解けるようなっているかというところを図るという意味ではできていないということになる。それではどうして全国学力・学習状況調査に IRT を導入するのかと私が文科省に尋ねたときには、パソコン上で全国学力・学習状況調査を実施するのでサーバーの負荷を軽減する必要がある。つまり全国の小６と中３が一斉にコンピュータサーバーにアクセスすると負荷がかかりすぎるので、試験日程を分散させる必要がある。ただ全く同じ問題だと、問題流出したときに意味がなくなってしまうので、毎回子どもによって違う異なる問題が出てくる IRT を採用したということで、IRT の本当の利点である個人内の伸びを図るというよりは、複数日に分けてテストを実施できる IRT にすることによってサーバーの負担を下げるということが主旨のようである。

ただ IRT にすることで、問題の質がある程度均一になる。これまでは質の担保がさほど保障されていないことから全国平均との比較でしかなく、本市が上がっているのか、全国的に下がっている中で本市が踏みとどまっているのか区別がつきにくいところがあったと思われる。IRT にすることで問題の難易度が均一になったとすれば、毎年の小６と中３の学力傾向として、同難易度の問題がちゃんと解けるように各学年がなっているかという比較はできるので、そこは利点になるかと思う。

学校教育課長　　庭山先生がおっしゃったように、今年度行われた英語の IRT のテストは、実施日を分散して実施されておりました。来年度、他の教科も IRT でということであれば、実施日を分散して行うかと思います。

徳山委員　　僕の子どもも全国学力・学習状況調査や様々なネット上の試験を受けるようになっているが、親からすれば、これまで以上に子どもの強みと弱点がよくわかるようになったので良くなったと思う。

学校教育課長　　本市のあまっ子ステップアップ調査が IRT 方式の調査になりまして、小学校１年生から中学校２年生まで同一集団で個人の能力の変化を見たり個人の強みや弱みをしっかり把握することができるようになっております。

徳山委員　　IRT 方式のテストは、親が自分の子どもの弱みや強みがわかるから、学校だけでなく塾とも色んなことを共有できるし、性格的な部分なども分析してくれたかと思うので、そういった統計が精緻になっていくことは、とても素晴らしいと思う。

片谷委員　　報告書の１ページを見て素晴らしいなと思った。過去の分も含めてグラフ化されているところ、令和元年から令和８年にかけてはすべてが右肩上がりになっている。右肩上がりになった理由と市内の学校ごとにばらつきが見られたりするのかを教えてほしい。

学校教育課長　　右肩上がりになっている要因としては、これまでの学力向上施策で基礎学力のところを中心に、例えば帯学習や放課後学習や学習支援員という形で、教室に入り込んで授業の補助をしてもらう等、地道な取組も功を奏しているのではないかと分析

しておりますのと、あまっ子ステップアップ調査等の分析をする中で、子どもたちの実態に合った取組を進めてきたことで、子どもたちの学力が着実に伸びてきたのではないかと考えております。学校ごとのばらつきについては、学校間格差は生じておりまして、総じて、北部に学力層が高い学校が多く、南部に課題を抱えるような学校が多く集まっているような傾向は見られます。今後、指導主事が学校訪問する中で、学校に助言をしたりしながら支援してまいりたいと考えております。

徳山委員　　色んな学校を見ていく中で、保護者との自宅学習に繋げるような取組が功を奏しているのではないかと思った次第だ。もちろん学習支援員など様々な取組で、レベルが上がっているようにも思うが、保護者との連携ノートなどをやり取りする取組をしている学校はうまくできているように感じた。

片谷委員　　徳山委員が言われたようなことが効果が出ているということであれば、取り組んでいた方が自信を持って行動できると思うので、まずいいところは伸ばしていけるよう続けたらいいと思った。

庭山委員　　経年で見た時に改善方向にあるのは、すばらしいことだと思う。先ほど、学校ごとにばらつきがあるとのことだったが、個人的に全国学力・学習状況調査の結果を他市の先生方と一緒に見る機会があるが、このテストを受ける前の小５や中２の学年の先生方、特に小学校では、意外と問題を見ていないことがある。尼崎ではどう取り扱いしているかわからないが、結果を学校側に返すときに今年の小６と中３の結果と合わせて実際の問題も見てもらうと、よりこの調査が役立つものになる。尼崎市の全体平均はこう、全国平均はこう、うちの学校の中３・小６がこうで、テスト問題はこういう問題だ、と見てもらって、例えば小学校１年生のここが大事だとか、小３、小５であればこの部分だとか、中１からの積み上げで中１のここはきちんと押さえといた方がいいだとか、今回うちの学校の中３はここが弱かったからこの問題もできるような子どもたちを育てようだとか、今の中１の子たちが中３になったときには、今年の中３と違ってこの問題は少し苦手そうだとか、そんな話し合いを５分でも取ってもらうとすごくいいかなと思う。今後のこの結果がそれぞれの学校の中で役立つよう適宜、指導主事の先生方から助言いただけたらと思う。
　また、あまっ子ステップアップ調査が IRT 形式なのを理解していなかったが、素晴らしいことである。縦断的に子どもたちの変化を１人ずつ追えるようにもなっていくと思うので、どの子が下位層に留まってしまっているのか、どの子が伸びているのか、どのクラスやどの学校の子たちが伸びているのか等をより詳細に分析すると、今後の教育施策にも活きてくるだろう。

学校教育課長　　全国学力・学習状況調査にしましても、市独自のあまっ子ステップアップ調査にしましてもその結果を踏まえて、学校現場の先生が自身の授業形態や、子どもたちの強み弱みをしっかり自分自身で分析して、次の授業改善に繋げることが大切になると考えております。この学校現場の活用も家庭での学習習慣の定着も大事ですけれども、こういった調査は、学校現場の先生にも大きく影響しているのではないかと考えております。

徳山委員　　子どもが家で友達と中間テストなどの勉強をしているが、最近は AI とアプリで会話してリスニングやスピーキングの勉強している。そういう学習効率を高めるツ

ールが飛躍的に出てきてるように思うので、予算が許す限り取り入れたほうがいいのではと思う。

森山教育長　　庭山先生に伺いたいんですが、市の施策評価の結果にも記載しているんですけども、全国学力・学習状況調査から、文章を読んで主語・述語・指示語などをきちんと理解して問題を解くという意味での読解力の弱さというのが尼崎の子どもの課題です。読解力は、国語だけでなく、あらゆる教科の問題にも影響しますが、読書量と問題を解く読解力は必ずしも相関関係はないという話も出ておりまして、読書量を増やすのは語彙力の増加や流し読みを防止する意味では有効と考えておりますけれども、それだけでは不十分とも考えております。読解力を強化するための効果的な取組があれば、ご教示いただけないでしょうか。

庭山委員　　読解力については国内でも国際的にも様々な取組があるところかと思うが、一貫しているのが、読解力は総合的な力であるとされているところだ。単純に読解力に課題があるからとダイレクトに焦点を当てた教育施策を行っても、読解力が上がるかというと別問題である。読解力は総合的な力なので、教育長が言及されたように語彙が不足していたら、長文読解みたいなことだけトレーニングしても読解力は上がらなく、語彙を増やすところから丁寧にやる必要がある。あともう１つ、国際的に非常に読解力と相関していると言われているのが、読みの流暢性と呼ばれる概念で、例えば漢字を正確に読めるだけや語彙があるだけでは読解力は伸びにくく、正確かつ素早く読めるようになるというのが非常に重要だと言われている。つまり流暢に読めるようにならないと、読解力の伸びのところを阻害するというのは研究としてかなり頑健にある。そういった意味では絶対的な読書量は必要であるし、流暢性を高めるような指導も必要になってくる。ただそれも語彙があるということが前提となる。読みが正確に読めるようになり、その次の段階として読みの流暢性を高めるようになってから、いわゆる読解力を身につけるとよく言われるような問題に取り組む、そういったステップを踏む必要がある。学校間でも違いがおそらくあると思うが、読みの流暢性のところに課題がある子どもが多い学校、そもそも家庭環境的にも語彙がどうしても少なくなりやすい学校、そもそも漢字の読みがどこまでできてるかとか、読み解く力の総合力を構成する各要素のどこに特に弱みがあるのかという分析ができると的確な教育政策に繋がると思うので、また整理した資料を共有させていただく。

森山教育長　　お話しいただいたあたりのご所見を、また共有いただけますとありがたいです。よろしくお願いいたします。

森山教育長　　最後に、全国学力・学習状況調査の結果報告は、今後どのようにされていくのか教えていただけますか。

学校教育課長　　全国学力・学習状況調査の結果報告につきましては、学校に周知するとともに、ホームページでも公表して、広く市民の方にも知っていただけるようにします。また、各学校においても全国と自校の結果を照らし合わせて教育の充実を図ってもらえるよう指導・助言してまいりたいと考えております。

森山教育長　　それでは他に質疑がないようですので、これで報告を終わります。

森山教育長　　以上を以って、本日の日程は全て終了いたしました。これをもちまして、尼崎市教育委員会９月臨時会を閉会といたします。

以上、尼崎市教育委員会９月臨時会の議事の全部を終了したので、午前９時４５分、教育長は閉会を宣した。

尼崎市教育委員会９月臨時会において、以上のとおり議事が行われたことを記録します。